

「雄別鉄道開業100年」 ～おかえりなさい雄別鉄道C11 1～

石川 孝織*

蒸気機関車「C11 1」について

戦後復興期から高度経済成長期へ、輸送量が年々増加していた雄別炭砒鉄道(1959年、雄別鉄道に分社化)は、江若鉄道(滋賀県・1969年廃止)から蒸気機関車「C11 1」を1957(昭和32)年に譲受します(書類上は1958年)。国鉄C11形に準じて1947(昭和22)年に製造され、当初は沿線名所にちなみ「ひえい」(比叡)と命名されました(国鉄のC11 1とは別の車両です)。雄鉄には国鉄や私鉄から譲受した計5両のC11形が在籍し、主力機関車として活躍しました。

1970(昭和45)年、雄別炭砒の閉山にともない雄鉄も4月15日の運行をもって廃止となりますが、埠頭線は石炭だけでなく石油やセメント、飼料などの輸送も多く、港と国鉄線を結ぶ存在であったことから、第三セクター「釧路開発埠頭(株)」に引き継がれました。C11 1は予備機として残りますが、1974(昭和49)年にはディーゼル機関車が増備され、翌年廃車となります。しかし解体されず個人が購入、他の道内炭砒鉄道の車両とともに、以降、非公開で静態保存されていました。

東武鉄道により動態復元

「鉄道産業文化遺産の保存と活用」と日光・鬼怒川エリア(栃木県)を中心とした新たな「地域の観光活力創出」を目指し「SL復活運転プロジェクト」を立ち上げた東武鉄道(本社：東京都)は、C11 207をJR北海道から借り受け、2017(平成29)年から運行を開始、2018(平成30)年にはC11 1を日本鉄道保存協会から譲受し、動態復元を行うことが、さらに2020(令和2)年、C11 1は、東武鉄道の創立123年などにちなみ「C11 123」へ番号が改められることが発表されました。

当館での部材収蔵へ

そこで筆者は、「ナンバープレートを1枚ご寄贈いただけないか」と東武博物館に手紙をお送りしました(機関車には4枚のナンバープレートが取り付けられています)。ナンバープレートは同館で全て収蔵されることとなりましたが、山田貴子学芸員より、更新となった旧部材のうち釧路開発埠頭の社章が残る運転室(外板)、廃車時の役職員の氏名が書かれた炭水庫側面について寄贈提案がありました。輸送手段の確保が必要でしたが、星匠氏(株釧路新聞社)、小野寺俊氏(株小野寺組)に相談し、雄別鉄道100周年として2023(令和5)年、雄別炭砒・釧路開発埠頭に縁のある企業など5社1団体(阿寒共立土建(株)・株小野寺組・株釧路製作所・三ッ輪運輸(株)・村井建設(株)・雄別炭砒の記憶を残す会：五十音順)より協賛をいただけることとなり

* 釧路市立博物館



C11 1と雄鉄職員、前列左が剣持機関士(1960年代後半) 当館蔵

ました。6月には東武鉄道南栗橋SL検修庫(埼玉県)から釧路へ移送、釧路製作所本社工場に搬入し、同社により展示造作(可動式展示台)が製作されました。

セレモニーでは除幕も実施

8月26日、協賛各社、東武鉄道車両部長の大東明氏、そして雄鉄・釧路開発埠頭機関士OBの剣持英作氏にもご出席いただき、記念セレモニー「おかえりなさいC11 1」(感謝状贈呈や除幕など)、記念講演会「雄別鉄道開業100年～雄鉄C11 1から東武鉄道C11 123へ～」を開催しました。東武博物館山田学芸員からは部材寄贈への経緯を、東武鉄道車両企画課長兼車両管理課長の関山之郭氏からはC11 1(現C11 123)の復活までについて講演いただきました。

記念ミニ展示「雄別鉄道開業100年」

新たに当館所蔵となった運転室側面・炭水庫側面は記念ミニ展示「雄別鉄道開業100年」として、東武博物館から借入したナンバープレート、釧路から保存先の野幌への輸送時の「特殊貨物検査票」「車票」、当館の雄鉄関係資料とあわせ、2024(令和6)年4月6日まで展示中です。ミニ展示終了後も、発展を続けていた1960年代の釧路を伝える資料として、C11 1部材を保存・活用していきたいと考えています。

新たに収蔵、展示中のC11 1
運転室側面・炭水庫側面